

神様の結婚式 —不破八幡宮大祭について—

西内 希歩

(手塚 恵子ゼミ)

目次

1. はじめに
2. 不破八幡宮大祭とは
 - (1) 不破八幡宮について
 - (2) 一宮神社について
 - (3) 祭りの由来
 - (4) 現在の祭りの形態
3. 祭りの由来について
 - (1) 仮説
 - (2) 検証
 - (3) 結論
 - (4) 今後の課題
4. おわりに

民俗学に基づいて纏められた先行研究としては金良柱の『神々の結婚—四万十川流域社会における「ハチマンサン」とその変化』及び『儀礼の動態と現代社会：四万十川流域における「マツリ」とその変化過程からのアプローチ』が挙げられる。しかしこれらは、祭りの形態の変化とそれにかかる地域住民の受容について語っており、更に彼がフィールドとした水戸地区からの視点で描かれている。筆者が注目する「婚姻」という要素はあまり顧みられていない。また報告書としても少々古い。

よってこの論文では、不破八幡宮大祭の現在の形態を描写し、民俗学的知見から祭りの由来を検討したいと思う。

2. 不破八幡宮大祭とは

高知県四万十市不破に所在する不破八幡宮と、元崎に所在する一宮神社、またその周辺を氏子圏として毎年9月中旬頃に行われる。

不破八幡宮に祀られる品陀和気命を新郎、一宮神社に祀られる銚名御前・徳益御前・椎名御前の中の一柱を新婦として行われる神婚祭礼である。

(1) 不破八幡宮について

高知県四万十市不破 1392 に所在する八幡神社。旧社格は県社。明治以前は正八幡・広幡八幡と呼ばれていた。

不破八幡宮の起源は、京都から幡多荘に下向してきた土佐一条家の祖・一条教房のりふさが文明年間(1469～87)に京都の石清水八幡宮を勧請し、幡多郡の総鎮守としたこととされる。

品陀和気命ほむだわけのみこと・玉依姫命たまよりひめのみこと・息長足姫命おきながたらしひめのみことの3柱を祀る。このうち結婚式を挙げる新郎となるのが品陀和気命である。品陀和気命は第15代天皇(応神天皇)であり、息長足姫命は母(神功皇后)に当たる。

1. はじめに

不破八幡宮大祭—地元の人たちが「はちまんさん」と呼ぶこのお祭りは、四万十市で年に3つある大きなお祭りのうちのひとつで、当該地出身である筆者にとってももちろん身近なものであった。特に参道に出店が立ち並ぶ宵宮の日には、家族や、また友達同士で連れ立って訪れたものだった。

一方で、この祭りには「奇祭」と呼ばれる一面がある。それが「神様の結婚式」—神婚祭礼であることだ。日本神話等では神と神の結婚それ自体は珍しくない話である。しかし、神同士の神婚祭礼が執り行われる場所は意外に少なく、不破八幡宮大祭以外では滋賀県・賀茂神社の賀茂祭や熊本県・阿蘇神社の田作祭など全国でも2ヶ所ほどしか存在しない。

そんな稀有な祭りである本祭だが、調査報告書や郷土資料は点在するものの、学術的観点からその意義を検討したものは少ない。資料の多くも行政や郷土史学家が纏めたものである。また調査報告書も十数年前に作られたもので、変更点もある。

現在の本殿は、永禄元年（1558）から翌2年にかけて、一条康政に招聘された宮大工の北代右衛門によって建造されたもので、三間社流造やこけら葺などの室町幕府末期の都風の本殿建築であるとして重要文化財に指定されており、これは高知県下では最古に当たる。

(2) 一宮神社について

高知県四万十市初崎 409 に所在する神社。初崎・間崎の産土神社。旧社格は郷社。

祭神は阿遲鉏高彦根神だが、銚名御前・徳益御前・椎名御前の三柱も合祭している。この三柱の中から毎年くじ引きによって新婦が選ばれる。銚名御前は気性が荒く、喧嘩を呼ぶ神と言われている。徳益御前は平和と豊穡の神で、彼女が新婦に選ばれた年は平和で天候に恵まれるとされる。椎名御前は雨を降らす神といわれており、頭に禿があるとも伝えられる。

創建は不明だが、行政が作成した説明看板には「源満仲の勧請という口碑も残る」との記載があり、『府県郷社明治神社誌料』にも「多田満仲が天文年間に勧請」と記述されている。

(3) 祭りの由来

『不破八幡宮神事』（中村市教育委員会：1975）^①には

僻遠の土佐の西南端に位するこの幡多地区は、未開の土地とまでは言えない迄も甚だしく遅進

の土地であり、京都五摂家の一である一条氏の見から見れば一層その感を強くするものであって、当時盛んに行われていた〈嫁かつぎ〉の風習を矯正するために、八幡宮、一宮神社の結婚式を祭典神事におりこんで行い、しかも祭典費醸出のための賦課物もその土地々々の産物を利用し、供応のものなども極めて簡素なものをもってして、質素儉約を旨とし、毎年盛大に行えるようにし、こうして神事を通じて庶民大衆の生活指導を行ったものであるといわれる。

と記されている。

(4) 現在の祭りの形態

本年は、新型コロナウイルス感染症の流行によって例年通りの形態での祭り開催が難しく、例祭のみとなった。このため本祭の重要な要素である神輿合わせの神事などは執り行われていない。よって、この項では先行研究を基に聞き書きなどを取り入れながら現代の不破八幡宮大祭の形態を記述したい。

まず、祭りの形態を記したのものとしては、約13年前に纏められた『高知県の祭り・行事』（高知県教育委員会：2006）^②が詳しく、また大筋は変わりないと不破八幡宮宮司からも伺っている。これをもとに、不破八幡宮宮司と、昨年のお祭りを見学した母からの聞き書きを参照して現在の祭りを見学した母からの聞き書きを参照して現在の祭りを再構築する。

なお、文献調査の折にいくつかの郷土資料も参



図1 不破八幡宮 大祭当日（撮影：西内）



図2 一宮神社（撮影：西内）

神様の結婚式 一不破八幡宮大祭について

照した。当時の祭りの形態に留まらず過去の描写や変更点も記述されていたが、いつ変更されたのか、あるいは当時の描写なのか過去の描写なのか不明瞭な点もあった。これは金良柱も指摘している⁽³⁾。こうした混乱を避けるため、一先ず現在の祭りの形態を描写するに留めた。その変遷を見るには、蓄積した一定期間ごとの祭りの記録を比較検討するのが良いかと思う。

① 期日と場所

9月の第2あるいは第3土日に開催される。2019年は9月14・15日に開催。四万十市不破に鎮座する不破八幡宮と、7km下流対岸の初崎地区に鎮座する一宮神社でそれぞれ神事が執り行われる。

② 伝承組織

祭りの中心組織として、当番地区と氏子総代が存在する。

当番地区は右山・不破・宮田小路の三地区を指し、輪番で区長を中心に当番を務める。

氏子総代は13名おり、右山4名、不破4名、角崎^{つのさき}2名、宮田小路1名、百笑^{どうめき}1名、下田1名からなる。この13名の互選によって氏子総代会長を選ぶ。彼らが中心となって、後述の「八朔の会」を開き諸事万端の段取りをする。

かつては土佐一条家の直轄地域にあたる広大な氏子圏を形成しており、中村近郷の地域は「石がかり」と称して米を、遠方地域は板や藁、杭、竹、和紙などを拠出することになっていた。旧村名で言うと津大^{つだい}・江川崎^{えかわさき}・大川筋^{くどう}・具同^{ぐどう}・中村町^{なかつか}・下田町^{した}・八束。

このうち、「石がかり」にあたる次の地区が現在財政面を支えている。^{わらびおか}蕨岡、^{にゅうた}秋田、^{くすしま}田野川、^{さんざき}岩田、^{なかし}藤、^{なかし}敷地、^{なかし}利岡、^{なかし}佐田、^{なかし}入田、^{なかし}具同、^{なかし}森沢、^{なかし}楠島、^{なかし}坂本、^{なかし}実崎、^{なかし}山路、^{なかし}古津賀、^{なかし}佐岡、^{なかし}安並、^{なかし}鍋島、^{なかし}竹島、^{なかし}旧中村町内、^{なかし}右山、^{なかし}不破。しかし現在ではその氏子圏はかなり流動的になっており、祭典費用の拠出の有無はそれぞれの区長に委ねられている。八束地区には石付けという慣習があり、深木一斗一升、津蔵^{つくらふち}淵一斗八升、初崎^{なかし}七升、名鹿一斗一升、間崎二斗二升と決められており、一升を500円で換算した額が負担金となっている。また、旧中村町内と不破、右山はこの「石がかり」

とは別に毎年50万程度の負担をすることになっている。

③ 祭礼準備

新暦8月中旬に神輿洗いの神事が不破地区の青年達の手で行われる。

新暦9月10日に社務所において八朔の会が開かれる。祭礼の準備総会である。参加者は当番地区区長3名、八幡宮氏子総代13名、一宮神社氏子^{かみ}総代会長、間崎地区区長、水師代表1名、上の（不破八幡神輿）^{しも}供付地区区長、下の（一宮神社神輿）^{しも}供付地区区長、石がかり負担地区区長全員であるが、欠席者もある為、約34、5名となる。祭典日程、両供付と水師の当番地区の確認、祭典に関する予算、船戸上げ祭典場の確認、船戸上げの使者選定、八幡神輿の巡幸経路、神輿合わせ神事の指導、その他について協議される。

④ 不破八幡宮宵宮

不破八幡宮大祭の初日は両神社で宵宮が行われるが、まずは不破八幡宮の宵宮を記述したい。

午前11過ぎ、神職2人が2km下流の角崎地区へ向かう。角崎地区では区長以下5名の氏子が迎え、合流してさらに下流の四万十川と後川が合流する付近の河原に出、潮垢離の儀式が行われる。氏子達が敷物を広げて座を作り、神職が川に向かって作った簡単な祭壇に米・塩・じゃこ・水を盆に載せて供える。区長は川から手桶に潮水を迎えて祭壇に供え、神事が始まる。まず神職が「これから潮垢離をとります」と挨拶し、短い祝詞を奏上する。全員を祓い、鈴を振りつつ祝詞を奏上する。氏子全員が玉串を奉典して神事を終え、簡単な直会となる。迎えた潮水は八幡宮へ運ばれ拝殿の大櫓の前に供え置かれる。後の公式祭の際に神前に奉祭し、翌日神輿巡幸の際、巡幸道の清めに使う。

ほぼ同時刻、八幡宮の旧宮司宅では結納と引き出物渡しの儀が行われる。一宮神社から間崎地区氏子4～5名が使者としてやってくる。八幡宮側は神職2名が酒と肴^{さわち}（皿鉢と生姜味噌）で簡単にもてなし、結納と下記の引き出物を渡す。結納は一宮神社の祭典費用である。引き出物の品々は「高屋の祭典」で使われる。

〈引き出物の品々〉朱塗の酒樽（中に一升瓶2本）・折口（竹製の柄杓）2個・ケ（竹製の盃）・へぎ（6×8cmの檜のへぎ板2枚の間に米粒を挟み、^{からむし}苧麻で十文字に括ったもの）11個・苧麻・中折・とへい桶3個・ゴザ1枚

午後3時から公式祭。約1時間の神事が行われる。拝殿に仮奉祭されていた榊・幣・塩垢離桶をお祓いして神殿に奉祭し神事を行う。参列者は不破・右山・大橋通4丁目・角崎の4区長、市長、氏子総代3名。

次に、宵宮祭が行われる。この神事は当番地区の3区長が揃わないと執り行うことができないとされている。3区長と神職で簡単なきき酒が行われる。参列者は3区長の他角崎区長、氏子総代13名、市区長会長、市長、市議会議長、商工会議所会頭など約20名。神事次第は1,座付神楽 2,お神扉開き 3,お供え 4,祝詞奏上 5,念禱神楽 6,座直り神楽 7,座直り 8,本神楽（幣の舞）9,お酒盛り 10,玉串奉典 11,お神扉じまい となっている。お供えでは、神職2人がお神酒と二股の茄子をそれぞれ三方に載せて神前に供える。この祭礼では二股の茄子が重要な供物で3つ用意される。そのうちの1つがここで使用される。普通の神事では神職・参列者が神殿に向かって上座から高位の順に座を占めているが、本神事では開始当初、参列者の席は各自適宜であり、神職の側は宮司が一番末席に座り下級の神職ほど上座に着く。座直りになると神職はそのまに参列者の座席が次のように整序される。宮司の正面に本年当番長が座し、上座に向かって翌年、翌翌年当番区長、総代会会長、市区長会長、一般総代と約10名が座し、他は適宜拝殿に座すことになる。お酒盛りの神事では二人の神職が行う。うち一人（a）はネドリと称し、樽から長柄の柄杓で酒を汲む役で、もう一人（b）は参列者に銚子でお酌をする役である。儀式が始まると二人は廊下の脇にある小部屋で、まずbが三方にケを一個載せて宮司の前に運び元の部屋へと戻る。aは樽から酒を汲み取った柄杓を持ち、bは空の銚子を持って参列者が居並ぶ廊下に出、互いに向かい合い、持っている容器の柄を左にして目の高さに掲げ、左右左と三歩前進し左足を重ね合う。そして左足を一步後ろに引いて左膝を床につけ、aがbの銚子に酒を注ぎ込

む。bが宮司の前に進み三方のケに酒を注ぎ献杯する。宮司が飲み干すとケを三方に戻し本年当番区長に回し、再びaに酒を注がせ区長に献杯する。その後は次席の神職および翌年当番地区長以下が3つのケで3人づつ献杯される。

宵宮祭が終了すると拝殿西側に増設された仮舞台で町内の舞踊同好会婦人たちが踊りを奉納し、次に神楽が夜更けまで奉納される。境内では奉納相撲が行われ、参道にも屋台が建ち並び参拝客で一際賑やかになる。

同時刻、旧宮司宅では宵宮祭参列者や地区の人々5～60人が宴会を開く。翌日の「茄子取り神事」の使者に対し「歌は用意したか、一口披露せよ」とか「嫁に来る御前様の名前は確かめたか」と揶揄したり、「御前様はこの茄子を喜びやせんか」と珍奇な茄子を持ち寄り、卑猥な品評の言葉が飛び交う賑やかな饗宴が夜更けまで続く。この宴会には田芋が欠かせぬ肴となっている。

⑤ 一宮神社宵宮

午後1時から神輿飾りが行われる。これは毎年間崎集落の当番氏子が担当する。当番は間崎集落を天満組、東組、中央組、西組の4組に分け、この4組の順番制である。当番組はこの他に神饌の調達、宮総代の宮籠りの夕食・朝食、下の共付きの者たちの昼食など大祭終了までの食事も調達する。

午後5時30分ごろに不破八幡宮より神職が来て宵宮の祭典を行う。なお、一宮神社の宮司は不破八幡宮の宮司が兼任で勤めており、この一宮神社宵宮の日は不破八幡宮宮司以外の神職がこれに当たる。特徴的なものとしてはみくじ引き神事が挙げられる。徳益御前、椎名御前、鉾名御前の三女神の中から新婦を決めるための神事である。三方の上にそれぞれの神名を記した2×10cmの紙片を軽く丸め並べ置く。榊に幣を総状に結びつけた招袴幣を手にした神職がこれを左右に振り動かし、附着した神名の女神が新婦に決定する。続けて御魂移しが行われる。椎名御前は多雨、鉾名御前は争いごと多く、徳益御前だと豊作という年占いにもなっている。神輿の中は二段になっていて、上段にご神体、下段には三々九度盃と柄杓と肴を入れる。盃は口径2.5cm、深さ6cmの竹筒で2個、肴はへぎ11個である。

神様の結婚式 一不破八幡宮大祭について一

この夜は宮総代3人が神輿番として宮籠りをする。

⑥ 一宮神社神輿船御神幸

大祭当日早朝、神輿船が一宮神社に向けて出発する。神輿船は満潮に合わせて出航するため、決まった時間はなく、年々によって出立時間が異なる。水師と呼ばれる氏子たちが担当して出しており、一宮神社の対岸である下田地区のうち、水戸、串江、下田下・松の山と4地区が3組に分かれて順番制でこれを担う。水師にかかる費用は八幡宮より約8万円支給されるため、各戸よりの徴収はない。

神輿船は宵宮の日の早朝から当番区に近い岸辺で飾り付けが行われる。船尾の梁に660cmの孟宗竹を固定し、元から50cmの部分に径77cmの竹で編んだ丸輪を取り付ける。この丸輪に幅6cm長さ490cmの皮竹を左右2本ずつ固定する。孟宗竹の先端部分と合わせ5本の皮竹部分には幅10cm、長さ25cmの五色の短冊が貼り付けられている。皮竹部分はたわむようになっているが、孟宗竹の竹先には剣先御幣が差し込まれ、これをシンガイと呼ぶ。このシンガイは御幸が終わり、下田地区に戻ってくると当番組の戸数に合わせて切れ、魔除け・災難除けとして門口に挿される。これの他船首に長さ50cm太さ20cmのサガリを吊り下げる。

神輿船には下田地区にある貴船神社にちなんで貴船丸という名前がついている。貴船丸は動力船ではないので、10t足らずの動力船で曳航する。

実崎付近に着岸し上陸した水師たちは一宮神社に向かい、神輿を担いで船に乗り、約7km川上の不破八幡宮の船戸（着岸点）に向けて再び出航する。道中、太鼓を叩いての舟歌が囃される。ただし、鍋島地区から井沢集落までの間は舟歌を唄わない。昔の水子供養に由来するという。また井沢集落前で停泊して、区長から御神酒を一本拝領する。

約3時間後、神輿船は不破八幡宮前船戸に着岸する。宮総代は船の上で朝食をとる。

神輿船を追うように、下の供付きの人たちを乗せた船が到着する。船戸に到着した神輿は、水師から彼らに引き継がれる。下の供付きは八東地区及び対岸の鍋島地区の氏子たちを5組に分け、順

番制で30～40人が担当する。組分けは間崎・津蔵淵・初崎・名鹿、実崎・深木、山路・坂本、井沢・竹島、鍋島・馬越^{うまごえ}である。またこの供付きとは別に、間崎集落の氏子のみで構成された供付きもやってくる。こちらの供付きは神輿に一切触れず、ただお供に徹する。

⑦ 不破八幡宮神輿巡行

午後7時半、上の供付きが不破八幡宮に集合し、門出の振る舞い酒を頂いて8時に町内巡行に出発する。12時ごろに還幸し、供付きの者は神輿合わせまで旧宮司宅で昼食をとる。上の供付きの組み合わせは不破・右山・角崎、古津賀、安並・秋田、佐岡・大橋通4丁目・丸ノ内・百笑、入田、具同である。

⑧ 茄子取りの神事

午前11時、不破八幡宮の旧宮司宅で使者たちの門出の宴が簡単に行われ、神職一名、ソウジャ2名、樽持ち4名が船戸に向かい、茄子取りの神事が始まる。船戸上げの神事とも呼ばれる。

宮総代二人は神職とともに神輿船に乗り込む。神輿の前には水師組の地区長ら3人が腰掛けており、彼らに二股の茄子を差し出して姫神をもらえるよう頼み込む。水師側は、「そのような小さなものは受け取れん、もっと綺麗な茄子でないとダメだ」「川に入ってゴリを獲って来い、ゴリを三枚に下ろして酒肴にせよ」などといった悪口難題を投げかける。不破側の宮総代たちは平に謝り、「神輿がおかえりになるまでにゴリを届けます」などと約束すると、水師側は「約束するならば」と渋々二股茄子を受け取る。これによって女神を男神に授けることを許したこととなる。

これが終わると神輿は供付きたちに担がれて高屋に向かう。水師たちは河原で昼食を兼ねた持ち寄りの宴会を始める。

⑨ 上げ馬・流鎗馬

12時半頃から上げ馬と流鎗馬が行われる。

馬を飼う家が無くなったので長らく廃絶していたが、2008年に復活した。馬や騎手は地元の幡多農業高等学校馬術部から借りている。馬一頭に騎手一人と馬の世話役として馬術部員が数名随行

する。上げ馬は、馬が上がる坂を造ることが困難なため、不破八幡宮前の河原に降りるための坂を利用して行く。上げ馬・流鏝馬共に順番や回数は決まっておらず、馬や騎手の状態を見て適宜行われる。



図3 流鏝馬 (撮影：西内)

⑩ 高屋の祭典

午後1時頃、高屋の祭典が始まる。

祭典場は不破八幡宮前方やや川下の畑地に仮設される。約8m四方を不破八幡宮の幟16本で区分し、その中に竹3本を三角形に組み先端を固定し頂にスポツキと称す笑帽子状のものを被せた、仮屋のようなものが建てられる。茄子取りの神事を終えた一宮神社側の神輿はここに据えられる。下の供付き数名が交差させた小幟を持ち仮屋の周囲に立って斎場の警護に当たり、一般の者は立ち入ることを禁じられる。

不破八幡宮から迎えの使者として神職4名、宮総代3名、荷持4名（樽持ち2名、太刀持ち1名、ゴザ持ち1名）がやってくる。神輿の前に太刀、二股茄子をつけた酒樽、ケを載せた三方、へぎを載せた三方、折口2本を供えて神事が始まる。

神輿に向かって右側に不破八幡宮の神職・宮総代、左側に一宮神社の神職・宮総代が並び、立ったままお祓い・祝詞奏上を行い、三々九度の盃事に移る。輿付きたちがゴザを敷いて座を作りその上に全員着座する。この際、一宮神社側の使者は席順が変わっており、神輿に一番近い上座を総代会長が占め、以下順次繰り下がる。

3人の媒酌役が登場し、へぎが全員に配られる。まず「宵宮祭」の「お盃」のネドリに相当する役で折口を持つa、同じく折口を持ってネドリから酒を仲介するb、それを盃の載った三方で受ける献杯役のcと役割がある。神輿に供えていた樽を右手に降ろし、aが樽から酒を汲んでbと向かいあい、「宵宮祭」の「お盃」とほぼ同じ所作をする。ただし、酒を酌み交わす際に左膝を着かず中腰のまま行う点のみ異なっている。酒を受けたbは参列者の中間に待すcの前に行き酒を注ぐ。cはまず一宮総代会長の前に進み一杯献ずる。これを三回繰り返す、次に不破八幡宮宮司の前に進み一杯献ずる。以後、一宮神社側3杯不破八幡宮側1杯の形式で盃が順次交互に全員を巡っていき、最後に一宮総代会長に戻る。参列者全員がへぎを懐に仕舞い、盃事が終了する。これを「亭主三杯客一杯」と呼ぶ。

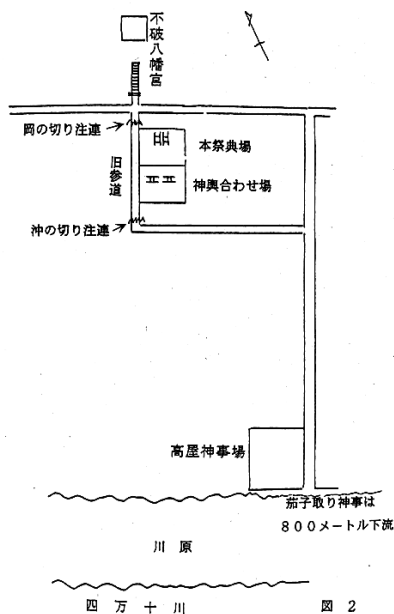


図4 斎場 高知県教育委員会『高知県の祭り・行事』

⑪ 神輿合わせの神事

「高屋の祭典」が済むと、神輿は八幡宮前の斎場へ移動する。斎場は旧参道脇の収穫を終えた田に不破八幡宮の幟を立てて約40m四方に区画し、中央部分を竹の柵で南北に区切る。不破八幡宮側の本祭典場には二社の神輿を載せるための高さ

1.5mの柵が設営されており、河原側の神輿合わせ場には輿台が東西に向かい合って置かれている。

一宮神社神輿は旧参道に至ると岡の切り注連・沖の切り注連の間を練りながら三往復する。この輿練りをコシモドシと呼ぶ。これが済むと一宮神社神輿は輿合わせ場に入り、宮総代の先導で輿台の周囲をゆっくり右回りに1周し、次に先導なしの駆け足で2周する。この時の斎場の四隅での方向転換をカクマワシといい、限りなく直角に近い形で輿の方向を変える。これをいかに見事にこなすかが輿付きの腕の見せ所とされている。続いて西面で南北に3回コシモドシ、南面で東西に3回コシモドシをして輿台に休める⁽⁴⁾。

続いて不破八幡宮の神輿も出来し、同じ要領で輿練りをして一宮神社神輿と向かい合わせにして輿台に休められる。

少し置いて、両社の氏子総代や地区長たちがそれぞれの神輿を少し持ち上げて、担ぎ棒をごつん・ごつん・ごつんと3回突き合わせる。これが「神輿合わせ」であり、まぐわいに見立てられるとされている。

⑫ 本祭典

「神輿合わせ」が終わると再び一宮神社神輿から総代の先導で本祭典場へ移動する。ここでも「神輿合わせ」の時と同様に斎場をゆっくり一周し、カクマワシをしながら駆け足で2周する。そして南面で東西に2回コシモドシをし、3回目の途中で柵の正面まで来ると柵に向き直り、2回コシモドシをして掛け声とともに神輿を差し上げ柵の東側に据える。不破八幡宮神輿もこれに続き、柵の西側に据えられる。両社神輿が並ぶと柵の前に座が作られ、両社氏子総代・地区長たちが参列し祝詞奏上など本祭典の神事が執り行われる。

⑬ 還御の川下り

午後4時ごろ、本祭典の神事が終了して一宮神社神輿が船に乗ると、往路と同様に水師によって太鼓・舟歌とともに川を下り、一宮神社に至る。ここまでが水師組の務めである。御魂移しが行われ、すべての神事が終了する。間崎当番組は神輿飾りを取り除き、宮総代たちは夕食を兼ねた直会となる。

3. 祭りの由来について

(1) 仮説

不破八幡宮大祭を検討するにあたって、まず最初に行き当たるのが、奇祭と呼ばれる由縁でもある「神様の結婚式」-神婚祭礼であることだ。先にも述べたように、神婚祭礼を行う神社は少ない。それも、賀茂祭は古事記の再現、田作祭は予祝の儀礼となっているのに対し、不破八幡宮大祭は「嫁かつぎの蛮習を矯正するため」とされている。こうした民俗風習の矯正を目的として始まった祭りというのは、全国的に見ても稀なのではないだろうか。

そこで、まずは『不破八幡宮神事』に語られる「嫁かつぎ」について調査した。

『婚姻習俗語集』(柳田國男・大間知篤三:1975)⁽⁵⁾の「嫁もそひ」章「ヨメカタギ」の項には

四國を中心としてカタギという語も使はれて居る。土佐はこの風の強いところである。幡多郡ではこの嫁擔ぎが今も少しは行はれて居り、かくして得た妻をばカタギニヨーボーと言ひ、その場合に女を連れ出すのは婆さん等に依頼するが其女をスピキ、連れ帰って女家に通告するのをスケトドケ、然る後に娘の親が来て娘と二人のみになつて娘の意向を訊ぬるのをメンタイと稱して居る。

とある。「カタギ」とは、幡多の方言で「担ぎ」を指す。「カタグ」で「担ぐ」となるのだ。『不破八幡宮神事』などで行政が「嫁かつぎ」と表記しているのは、「ヨメカタギ」を漢字で表記すると「嫁担ぎ」となり、これを方言ではない読み方をした(あるいは矯正した)からだと思われる。

これが行政側の言う略奪婚「嫁かつぎ」であろう。

この「嫁かつぎ」もとい「嫁かたぎ」、『実録・嫁かたぎ婿かたぎ：昭和の時代まで続いた“嫁さらい”の記録』(田村恒夫:2013)⁽⁶⁾によると最後に行われたとして昭和35年の事例が掲載されている。

第二次世界大戦前後から、嫁かたぎは急速に廃れた。私の知る限り、最後の嫁かたぎは昭和三十五年にあった。これも、母の嫁かた

ぎの裏付け調査にと聞き取りをする中で教えてもらったことだが、それには私の親しい男性が重要な役を受け持っていた。ここからは、彼の話の聞いたまま紹介する。

私が若くして大工の職人をしていたときのこと、土佐清水の町で大きな仕事があった。材料も工法も選りすぐりの、自分の職人時代を通して一番印象に残った仕事だった。

私を含め三人の職人は足摺に住んでいたの、そこから通うのは不便で、現場の隣家の離れに半年間下宿した。その家には中学を卒業して二年ほど経った、かわいい顔をした娘がいた。彼女は年齢以上に大人びて見えた。

一緒に下宿したA君は、私より一つ年上であったが、仲の良い気の置けない友人だった。そこで朝夕の食事をともにする中でA君はその娘に思いを寄せるようになり、彼女も親しく口をきくようになった。その当時、都会では若者がデートをするのは当たり前のことになっていたが、田舎ではまだ映画の中だけのことで、恋愛が親に許される時代ではなかった。若者たちはみな恋愛結婚を望んでいたが、親たちはまだ恋愛という行為を許そうとはしなかった。

その仕事が終わってからも彼の思いは募り、自分の親に「彼女を嫁に取って欲しい」と相談した。親はその話を喜び、仲人を立てる前に知り合いを通じて相手の親におと聞き(可能性を打診)したが、「まだ嫁に出すのは早すぎる」との返事だった。これでは仲人を立てることもできないし、直接娘に結婚を申し込んでも望みはなかった。当時はまだ、自分の意志で結婚相手を決めることはできなかったのだ。

残念に思ったのは彼だけではなかった。良縁だと思っていた彼の父親もあきらめきれず、「こうなったら嫁かたぎをするしかない」と息子とけしかけた。親のころには嫁かたぎも珍しくはなかったが、息子の時代ではもう過去の風習となっていた。それにもかかわらず、息子も、どんな手段を講じてでもその女性と結婚したいと思いつめていた。

思い悩んだA君は、親友である私に「嫁

かたぎをしたい」と相談してきた。

私は驚いて、「今に時代にそんなことはできない、時代錯誤なので思いとどまった方がいい」と諭したが、彼の気持ちは変わらなかった。

仕方がないので、一緒に下宿したもう一人の相棒B君を呼んで相談した。

B君は彼の一寸な思いを知って、「結果はどうあれ、彼のためにやるだけやってみよう」というので、嫁かたぎは決行と決まった。相手の家族には三人とも世話になっていて恩を仇で返すようで心苦しかったが、これが成功すれば彼女も幸せになれるに違いないと思った。そして綿密な計画を立てた。

役割分担は、私が娘を連れ出す役と「つけ届け」といって娘の親に嫁かたぎをしたと知らせる役。B君が娘を足摺に連れていき、監禁する役。間に立って話をまとめる交渉役の選定と依頼は、本人の父親に頼むことにした。そのほかにも何人かの協力を得たと思うが、私は当時清水の町に住むようになっていたので、足摺でのことは詳しくはわからなかった。

決行の日、私は、目当ての娘とその妹を映画に連れていきたいと父親に申し入れた。父親は、半年間家族のように一緒に暮した私を信用してくれていたし、娘二人を誘ったので疑われることもなく、快く許可してくれた。

二人を連れだして、映画館の前で娘をB君に渡した。娘には「B君が君に用があるそうなので、ちょっとだけ付き合ってくれ」と言い、妹には、「姉さんは後からすぐに来るので先に映画館に入っていよう」と言って二人で映画を見た。足摺岬行のバスの最終時刻まであとわずかなので、彼女を説得して首尾よくバスに乗せることができたかどうか心配で、私は映画を見ながら心はそこにあらずだった。

計画では、娘をバスに乗せて足摺までつれて行き、B君の自宅の二階にA君と二人にして匿い親の承諾がおりるのを待つ手はずになっていた。

彼女は、A君が自分を嫁に欲しがっていることは先の打診で知っているはずだ。

映画が終わっても彼女は帰ってこなかつ

た。首尾よくいったわけだ。

映画館を出て、不安そうな妹をなだめながら一人だけを家に送り届けた。

嫁かたぎを経験した先輩からは「つけ届けは、玄関の戸が閉まっている外から大声で口上を述べ、その後は一目散に逃げてくるように」と助言を受けていた。そのあと親が凶器を持って追いかけてくるかも知れないからである。その日のうちに取り返さないと大事な娘を傷ものにされてしまうので必死になる父親と、娘を傷ものにしようとしている自分たちの立場の違いを考えれば、捕まれば命の保証はなかった。

わたしは、世話になった家族の大事な娘のことなので他人ごとのように扱えず、妹を玄関に入れて、帰り際に「お姉さんの方は大事に預かっているから心配いりません」と一言伝えた。それだけで親の世代には嫁かたぎにあったことはすぐに理解できる。父親は「何い！」と言うが早い手筈ちようなを持って追いかけてきた。仕事が林業なので山仕事の道具を部屋に置いてあったのだ。私は命の危険を感じ、そのあとは後ろも振り返らずに暗がりの街路を必死にどこまでも逃げた。今までの人生であんな怖い思いをしたことは、ほかにはなかった。

二、三日たって、交渉役の総代（村を代表する長老、区長とは別）が間に入り、何度か通って話をまとめた。話がまとまる数日間、二人だけで過ごした二階で何があったかは、二人にしかわからない。

その後内輪だけの簡単な儀式を済ませて二人は夫婦になり、幸せに暮らした。

この頃には同世代の若者に実行する者はおらず、親や、または祖父母世代の古い風習として捉えられていたようであるが、『婚姻習俗語集』で柳田が報告しているように昭和初期ごろまでは一般的に行われていたと考え、この報告とも時期が合う。

ここで一つの疑問が生まれる。

「嫁かたぎ」の矯正策として祭りが行われ始めてから、500年以上も続けられているのにも関わ

らず、近代まで「嫁かたぎ」は行われていたことになるのだ。目的に対する効力を全く持たない祭りが、一条氏の治世から長宗我部氏、山内氏の時代を経て現代まで続けられている。

一条教房は、本当に「嫁かたぎ」の矯正を目的としてこの祭りを始めたのだろうか。この祭りには、何か別の目的があったのではないか。

土佐一条氏の祖であり不破八幡宮大祭を始めたとされる教房は、京都五摂家の一つ一条家の出身で、応仁の乱を避けて莊園であった幡多の地に逃れてきた。京の都では左大臣や関白も歴任した、有力な政治家でもあった。

教房は中村の地に条坊制を敷き「小京都」の形に整えた。このことは平安京の神話的世界観⁽⁷⁾の踏襲を感じさせる。

一方、教房は有力国人であり臣下に降った加久見氏の娘を後室として迎え入れ子を成している。教房は下向してきた領主という難しい立場であることを意識して、在地の有力者との通婚を通じて、自身の権力基盤を中村の地に根付かせようとしたと見なせよう。

このように、一条教房は冷徹な政治家と言う一面を持つのだが、現代においては、彼のこのような側面は全くといっていいほど顧みられていない。

例えば教房が京風のまちづくりを行なったことは、教房が京都のまちを偲んで造らせたと語られている。毎年5月初旬に行われる「藤祭り」は、京都から下向してきた一条教房の中村入府を再現したものであるが、そこに京の都の公家という高貴さゆえの煌煌しさはあれど、外来の為政者としての峻厳さは感じられない。金良柱も一条教房をして「文化的英雄」と称している⁽⁸⁾。現代での一条教房は、中村の地に京風の文化を持ち込んだ文化人としての捉えられ方が強いのである。

こうしたイメージを積極的に作り上げているのが、四万十市教育委員会や中村商工会議所などの行政である。そもそも「嫁かたぎ」矯正説の初見も、中村市教育委員会がまとめた『不破八幡宮神事』である。

「嫁かたぎ」の矯正説も、為政者としての面より文化人としての面を強調したい行政が、当時風化しつつあった「嫁かたぎ」を利用したもので、一条教房には祭りにそれ以外の為政者としての目

的があったのではないだろうか、という考えを持った。

さて、「嫁かたぎ」の矯正という可能性を取り除いた今、再び「結婚式」という形式を取ることに注目せねばなるまい。

まず、不破八幡宮大祭で行われる結婚の形態は、嫁入婚であると言えよう。不破八幡宮の神輿も市中を練り歩くものの、不破八幡宮で結婚式が行われ、一宮神社の神輿はそれに赴くこととなる。江守五夫⁽⁹⁾は、婚姻は二つの親族集団（氏族共同体）の間に締結され、一配偶者の帰属変更を伴うので、婚出側の集団が婚入側の集団に対して何らかの対価を要求する場合が多いとしているが、これも不破八幡宮大祭の茄子取りの神事などに見ることが出来る。瀬川清子⁽¹⁰⁾は嫁入婚を遅く発達し、またその採用が上層社会に始まったとしていることから、中村にこの結婚形態を持ち込んだのは一条教房と見て相違ないだろう。

では何故、結婚形態をわざわざ祭典神事に盛り込んだのだろうか。

柳田國男⁽¹¹⁾は、農事季節に援助を送ることを婚姻の義理とする事例があることを述べ、略奪婚ではない家と家の縁組は労働の助け合いを意味するものとしている。

すなわち、婚姻は人的資源を確保するための手段であり、それは両家の友好や同和といった側面を持って行われるということである。

もうひとつ、不破八幡宮大祭には大きな特徴がある。

それは、非常に広大な氏子圏を持つことである。不破八幡宮と一宮神社の結婚式と聞くと、不破地区と、一宮神社の氏子圏である初崎・間崎地区の氏子達のみが祭りを執り行うように感じられる。しかし実際はそれぞれの地区の産土神には関係なく、この祭りのみの特別な氏子圏としてかなりの範囲の地区を包括している。これは古くは旧西土佐村まで及び、それは一条氏の直接支配を受けていた地域と一致する。

最後に、結婚相手となる一宮神社に注目したい。新婦となる女神は鉾名御前・徳益御前・椎名御前の三柱から選ばれるが、主祭神は阿遅鉏高彦根神で、農耕神である。こうした農耕や竈など生活に根差した信仰は原始的なもので、日本の八百万の

神々の中でも古いものだとされている。対して不破八幡宮は一条教房が幡多に下向して来てから勧請した神社である。つまり不破八幡宮大祭は、古い神と新しい神の結婚という性格を持っていると言える。

以上のことから考えると、一条教房は婚姻という手段を持ってして、古い神を嫁として迎えることで地域住民との和合の姿勢を広く知らしめ、自身の直轄地での権力基盤を固めるという狙いがあったのではないかという仮説を立てた。

次節では、この仮説を検証するため、不破八幡宮大祭で重要な役割を占める地域の政治的關係について見ていきたい。

(2) 検証

・中村市街地

不破八幡宮大祭では、不破八幡宮の神輿が巡行する。

土佐一条氏の邸宅「中村御所」が所在した。

中村市街地からは縄文時代晩期の貝塚が発見されており、稲作の流入による耕作地として開拓されたとの指摘がある⁽¹²⁾。これは、中村市街地が四万十川と支流である後川の中洲に位置し、頻繁に洪水被害を受けるため、居住地には適し難いか

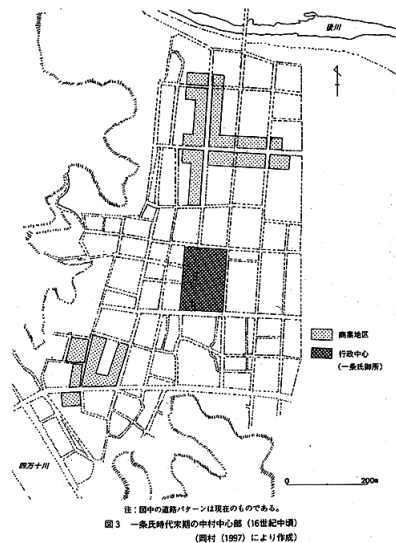


図5 旧中村御所位置『地理学研究』第48号
北の後川、西南の四万十川に挟まれた
土地であることが分かる。

神様の結婚式 不破八幡宮大祭について

らである。現に、のちの時代になっても、1659年に「中村町流出し」、1666年「中村下モ町大堤切れ、家一軒も不残、町は河原に成。」1849年「9・11の洪水は小性町より、高きこと凡そ四尺五寸斗り成りしと。」「下町築地切れると夜分人々声を出して通る。」など古文書に洪水被害が描かれる⁽¹³⁾。こうした理由からか中村の地は『東福寺文書』に「本郷」として数えられつつも為政者が居住することはなかった。むしろ四万十川対岸の具同地区に縄文晩期の土器も出土した具同中山遺跡群があり、祭祀が行われていた痕跡が残っている⁽¹⁴⁾。他、平安時代からは郡衙が置かれており⁽¹⁵⁾、こちらが行政を担っていたと考えるのが自然であろう。

都市的発展を得たのは、一条教房とともに downward してきた公家や臣下、また商人や職人たちが住むようになり、一条教房から次代房家の時代に条坊制によって整えられてからだと考えられる。現在でも「お町」と呼ばれる幡多郡の中心部であり、経済・行政ともに中枢を担う。

一条教房にとってはいわゆる「お膝元」であり、教房の権力基盤の要となる土地である。

・不破・角崎

不破八幡宮が所在し、不破八幡宮大祭の中心的役割を為す。

不破では中世の不破遺跡しか出土していない⁽¹⁶⁾が、角崎からは古墳時代の遺跡が見つまっている⁽¹⁷⁾。また不破千軒の伝承も残る。

一条氏は角崎を重臣である為松氏、大和田氏、土居氏に与えており、また長宗我部氏も中村城配下の侍である中村衆を多く配置していることから、岡本憲治は、四万十川と後川の両方の水路を抑えられる中村城の前衛地点で、軍事的に重要な土地であったのではないかと推測している。

・下田港

不破八幡宮大祭では水師の役を務める。

四万十川河口に位置し、江戸時代には豪商・新屋などが生まれ近代まで大いに栄えた県西部における一大港であった⁽¹⁸⁾。中村市街地は先ほど述べたように侍や商人の他に職人や町人が住んだが、江戸時代の下田港では商人が大きな力を持ち、中村市街地とは違った形で、かつ大規模に発展して

いた。その名残か、今でも竹島地区など農耕を産業としてきた地域の人々は、下田地区を「ハマ」とか「ハマブン」とか呼んで自分たちと区別する⁽¹⁹⁾。

無論中世においても主要な港だったと考えられ、重視されている。

一条氏と海運については、『大乘院寺社雑事記』文明11年3月22日の条に

一、家門造管用下山才木 自土佐御所 和泉堺ニ被付之云々

御注文分

一寸三尺柱	三十本四六云々
八尺柱	二十本土居シキキ用云々
ケタ	十本四ヒロ
ヌキ	五十本二間木
板	五十枚三ヒロ
	以上百十本 板五十枚
	文明十一年正月十八日

とあり、一条教房が京都の一条家の邸宅の再建のため材木を送った記録が見られる⁽²⁰⁾。

また『天文日記』でも、房家が一条家に、房基が大阪石山本願寺に向けて堺港を經由して弓を送った記録があり、当然堺港との取引も行われていたと考えられる。これらの記述に出発港の記載はないが、特に材木の方は四万十川上流で切り出し、そのまま川を下って下田港を中継したと考えるのが自然であろう。

その他『大乘院寺社雑事記』では文明元年8月13日の条に

一、唐船帰朝 大内可落取之由在其間 経九州南 著四国土州ニ著云々

とあり、文明元年帰朝の遣明船は九州の南端から土佐に至っていることがわかる。

また、同じく文明15年12月12日の条に

一、唐船三艘進発近日事也 長門以下路次難義間 可越年土佐幡多 自四国可渡唐云々

とあり、文明15年発の遣明船が幡多で年越した

とされている。豊田武や米倉二郎、藤岡謙二郎らも遣明船の南海路における中継地として土佐の中村を挙げている。

『天文日記』では堺の客衆が房基のもとで遣明船の建造を計画しているのも見られ、対外貿易が行われていた可能性も残る。時代が下がって『長宗我部地検帳』の記載にはなるが、下田地区には船番匠武正河内の給地があり、遣明船の造営もここで行われる予定であった可能性も指摘されている。

『大乘院寺社雑事記』文明9年10月29日条に

一、土佐御所より朔日御書到来、人參・胡小被下之、今日油煙三十領本進上、

とある記述も、これを強化する証拠となろう。

また市村高男⁽²¹⁾は、一条氏の家臣で教房の後室も輩出した加久見氏が「海の領主」であり、彼の主君である土佐一条氏が海運・流通に深く関与していたことを指摘している。

一条教房も、海運・流通を抑え経済を掌握するために、太平洋に面するだけでなく四万十川沿岸へもアクセスできる下田港を無視はできなかっただろう。

・間崎・初崎

一宮神社が所在し、不破八幡宮大祭の中心的役割を為す。

間崎と初崎について、『下田郷土史料』（宇賀嘉弥太：1932）⁽²²⁾には

港口を入りて第一の岬あるを初崎といふ。今の初崎之れなり。その奥に再び岬あり。漢音により再崎といひしならん。後転じて実崎となりしならんか？初崎と実崎の間に崎あり。之を間崎といふ。この初崎と間崎にかけては一大港をなしたるものなり。この間崎は東南二面し、北西は山を負ひ、冬日は終日日光をうけて暖く人の住居に適したり。其故早くも人々集まりてひとつの町を成すに至れり。栗原町之なり。

とある。

実際に縄文時代中期のものと思われる間崎遺跡

と、縄文時代後期のものと思われる初崎遺跡が見つまっている⁽²³⁾。しかも、初崎では古墳らしき地形も確認されている。上記の栗原町に相当するであろう、栗原千軒の伝承も残る。

また『下田郷土資料』ではさらに

其より以下下田の浜にいたる間は平地といふものはなく、山のすずれ位の土地ありしものならん。この川面は広々とした入江であった。下田は下渡の義であつて川口の狭き所を下田側より初崎へ渡る場所ありしを下渡といひ、後、下田となりしものならんと。

下田は一体に磯の如き所で今も所々に岩の多くあるコトも知らるべし。かくの如き地形の下田は人の住居に適せざるため人口の繁殖も多からず。歴史的に顕はれたるものなし。故に昔の渡河口の文化は下田側よりも八束側の間崎に顕れたるもの多かりしなり。

(中略)

当時上方より畑の国へ来りし大官などは必ず渡り河へ即ち下田港より来たりしものならんも、何の伝説なきより考えふるに栗原町よりせるには非らざるか。

と、下田地区よりも対岸の初崎地区の方が歴史が古いことを示唆している。実際に、下田側では竹島以南に古代の遺跡を見ることはない。

下田地区よりも初崎地区の歴史が古いという説は伝承にも見られる。

例えば、下田地区・串江の名が「対岸の初崎から見たとき、木が団子の串のように見えるから」と付けられたという伝承や、同じく水戸の名が「対岸の初崎の水戸港神社から」取られたという伝承が残っている。

また、一宮神社についても記述しておきたい。

一宮神社の由来について『府県郷社明治神社誌料』⁽²⁴⁾では「多田満仲が天文年間に勧請」とあるが、多田満仲は912年～997年の人物であり、天文が1532～1555年と時代が噛み合わず、さらに一条教房が下向した後に創建したことになってしまうので、誤りであり、創建は不明と考える。

まず、「一宮」という名前に注目したい。神社名にこの漢字を用いる場合、「いちのみや」と読

神様の結婚式 ―不破八幡宮大祭について―

むのが通例である。しかし土佐の人々は何故かこれを「いっく」と読む。土佐国一宮土佐神社も、最寄駅名は「とさいっく」となっている。更に、この土佐神社と一宮神社とは主祭神の阿遲鉏高彦根神も同一である。土佐の人々は明らかに土佐神社と一宮神社を同一視しているのである。

しかし「一宮」とはその地において最も格の高い神を指し、原則的に一国一社とされている。二宮とせず、同じ県下に2社見られるのはおかしい。

これについて筆者は、波多国造時代の一宮に当たるのではないかと推測する。

波多国造は、律令制時代に現在の幡多郡に置かれた国で、『先代旧事本紀』の10巻『国造本紀』に

はたのくにのみやつこ
波多国造
みずがきのみかどのみよに あめのからそのみことを かみのさとしによりて
瑞籬朝御世、天韓襲命、依神教云、
くのみやつこにさだめたもう
定賜国造。

としてその名を見ることができる。

みずがきのみかど
瑞籬朝、つまり崇神天皇は3世紀後半の人物と考えられており、一宮制の成立は通説では11世紀から12世紀ごろとなっているので、波多国造とは時代が合わない。

しかし相模国府祭のように7世紀以前に一宮争いを行なったとする伝承も残っている。

この一宮制の成立について、横井靖仁は⁽²⁵⁾ 国ごとに分け隔てがあって、各国の一宮は国家による法や政策を前提として一時期・一律に整備されたものとは言えないと指摘している。また吉井良隆⁽²⁶⁾ も、一宮制を中央からの布告を国内諸社へ伝達する機関であるとした伴信友の考えを否定して、一宮の所在地が必ずしも国衙に近い場所にあるわけではないことを指摘し、一・二宮を置いたことを「むしろ日本人の風習として順位付けを好む私的な行為が崇敬の上に現れたものではあるまいか」と推測している。

そもそも一宮制の制定においても、一昼夜で決定できるようなものではないはずで、吉井が推測したようにもともと地域住民に「あそのカミさんが一番偉い」という認識があり、それに基づいて制定されたと考えるのが自然であろう。相模国府祭にも、この認識が現れているのではなかろうか。

よって、一宮神社が一宮として制定されるより

前に、すでに地域住民にとって一宮神社は特別な存在であったことが考えられる。一宮と名付けられたのは一宮制の施行後で、それ以前は別の名があったか、無社名であったのではなかろうかと推測される。

もとより波多国造はすでに失われた国であり、古文書からそのありようを知ることはできない。その一宮制の施行についてもまた然りである。

しかし、一宮神社が古代より力のある神社であることを証明するかのようなのが残されているので、紹介しておこう。

一宮神社に奉納されていた七星剣である。朝鮮半島で5世紀頃に作られたと思われる鉄剣で、道教思想に基づくとされており、銀象嵌で北斗七星があしらわれる。日本で同様の意匠を持つのは、聖徳太子ゆかりの四天王寺所蔵のものなど数点見られるばかりの、希少な剣である。

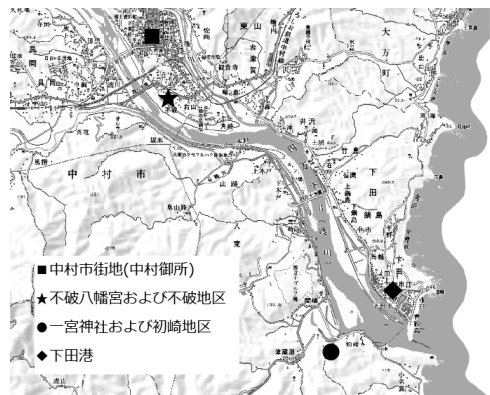


図6 不破八幡宮大祭において重要な役割を担う諸地域の位置関係図 (作図：西内)

(3) 結論

不破八幡宮における「婚姻」の意味を知るため、不破八幡宮大祭で重要な役割を占める地域の政治的關係について見てきた。

結果として、不破八幡宮大祭で特殊な役割を担うそれぞれの地域は、幡多中村という都市空間においても政治的に重要な位置を占めていることがわかった。(図6)

一条氏はこれらの地域に加え、「石がかり」の地域からは祭典費に代わる米を、遠方の旧西土佐村からは資材などを徴収することで、自身が直轄

管理していた地域全てを不破八幡宮大祭に組み込んでいく。

そして一宮神社という古く有力な神と、自身が勧請した不破八幡宮という新しい神に婚姻を結ばせることで、自身の直轄地の人々に向けて、古い権力と新しい権力の和合と、古く有力な神社から嫁を迎えることができるという威勢、そして自身の正当性を誇示する政治的な狙いがあったと考えられる。

(4) 今後の課題

今後の課題として、いくつかのことがあげられる。

まず、フィールドワーク調査の実施。2020年は、新型コロナウイルス感染症の流行によってフィールドワーク調査の実施が非常に困難であった。特に、不破八幡宮大祭は例祭のみと規模を大幅に縮小しての開催となってしまった。未だ先行きは不透明だが、平常開催できる日を待つばかりである。

次に、郷土資料の調査。こちらも非常事態宣言が発令されたことによって、図書館や資料館は軒並み閉館してしまい、フィールドにいるにも関わらず一度も図書館に通えないということもあった。

四万十市は行政が歴史教育に積極的でない⁽²⁷⁾反面、郷土資料家が非常に多い。先にも述べた通りその内容は精査が必要であるが、彼らの著作からは、中村の人々が中村の歴史をどう受容してきたかが如実に現れている。特に彼らの研究対象が土佐一条氏の治世に集中していることは、中村の人々が「小京都中村」を強く意識してきたことの証左ではないだろうか。こうした視点からも、郷土資料の更なる調査を進めたい。

続いて、行政の意識調査。前述したように行政側は不破八幡宮の由来を「嫁かつぎ」の矯正のためとしてきた。「嫁かつぎ」あるいは「略奪婚」の文字は、案内板や四万十市観光協会のHPなど至る所で見られる。

こうした行政の中で、不破八幡宮大祭と関わりが深いと考えられるのが中村商工会議所である。中村商工会議所は、2017年に『四万十の奇祭・不破八幡宮大祭「神様の結婚式」をもっと盛り上げたい!』と称しクラウドファンディングを行ない、集まった50万円で『不破八幡宮「神様の結婚式」』と題した漫画リーフレットを作成し、市

内の小中高生に無料配布している。このリーフレットにも「嫁かつぎ」の文言がある。

一条教房の中村下向を再現した藤祭りも、中村商工会議所の開催となっているが、これも関係があるかもしれない。

無論県や市も不破八幡宮大祭に補助金を出しているが、何故中村商工会議所が積極的に関わっているのか。また中村商工会議所を含めた行政側は不破八幡宮大祭をどう受容しているのか。この問題についてはまだ手をつけられていないため、市町村計画や議事録の中からそれを探りたいと考えている。

また、土佐一条氏と土豪や古城の関係についても調査せねばなるまい。一条教房の下向によって、先述の加久見氏など多くの国人・豪族はそのまま一条氏の臣下に降り、特に羽生氏、為松氏、安並氏は土佐一条家四家老にも数えられている。しかし下向前は敷地氏、布氏、入野氏などが幡多荘の押領を目論んでいたという説もある。間崎にも古城と間崎氏という豪族が存在したことがわかっている。幡多国人が、一条教房にとって敵対関係であり得たか、またその地理的關係は彼の政治方針にも大きく関わっているだろう。

最後に、「小京都中村」の地図化である。本稿を書くにあたって、いくつかの郷土資料を読んだ。その多くでは中村のまちが「小京都」であることを語り、具体的な地名や神社の建立などを記したのものもあるが、地図化には至っていない。一条教房が京都を意識したまちづくりを行なったのは、決して京都のまちに対する郷愁だけではなく、平安京の神話的世界観に基づいたものであると感じている。一条教房の為政者としての面を語る時、「小京都中村」の地図化はなくてはならないものになるだろう。

4. おわりに

本稿では、不破八幡宮大祭の現在の形態を記述し、民俗学的知見から祭りの由来を検討してきた。

これまで何気なく通ってきた地元の祭りに、これほどの歴史と謎が含まれていたことは非常に興味深く、民俗学への想いをより強くさせた。

由来についての考察では、一条教房の為政者と

神様の結婚式 ―不破八幡宮大祭について―

しての一面に迫った。特に、これまで、いや今現在も、ただのはちまんさんの「結婚相手」として顧みられることの無かった一宮神社に、古く有力な神社であるという性格を見出せたのは研究を始めた当初は思ってもみなかったことで、満足している。

最後に、2年前、不破八幡宮大祭に関する拙い発表をした際に、「古い神と新しい神の結婚」という大学生の命題を示してくださった小松和彦先生、所属ゼミである手塚恵子教授をはじめここまで導いてくださった佐々木高弘教授、堀田譲特任教授、鍛冶宏介教授、調査にご協力いただいた不破八幡宮宮司様、先輩方、母に心から感謝し、御礼申し上げます。

・注

- (1) 中村市教育委員会 (1975) 『不破八幡宮神事』
 - (2) 高知県教育委員会 (2006) 『高知県の祭り・行事』 83 頁 - 93 頁
 - (3) 金良柱 (1994) 『儀礼の動態と現代社会：四万十川流域における「マツリ」とその変化過程からのアプローチ』 東京大学大学院総合文化研究所文化人類学博士学位論文 212 頁
 - (4) コシモドシ・カクマワシは祓えに由来するという。不破八幡宮宮司談
 - (5) 柳田國男・大間知篤三 (1975) 『婚姻習俗語集』 筑摩書房 253 - 254 頁
 - (6) 田村恒夫 (2013) 『実録・嫁かたぎ婿かたぎ：昭和の時代まで続いた“嫁さらい”の記録』 エリート情報社 21 頁 - 25 頁
 - (7) 佐々木高弘 (2014) 『神話の風景』 古今書院 205 頁 - 209 頁
 - (8) 金良柱 (1989) 『神々の結婚 - 四万十川流域社会における「ハチマンサン」とその変化』 『民族学研究 54 巻 3 号』 収録) 327 頁
 - (9) 江守五夫 (1986) 『日本の婚姻 - その歴史と民俗 -』 弘文堂 421 頁
 - (10) 瀬川清子 (1957) 『婚姻覚書』 大日本雄弁会講談社 114 頁
 - (11) 柳田國男 (1948) 『婚姻の話』 岩波書店 568 頁
 - (12) 中村市史編纂室 (1969) 『中村市史 正編』 中村市 73 頁 - 84 頁
 - (13) 中村市史編纂室 (1984) 『中村市史 続編』 中村市 244 頁 - 251 頁
- なお、中村市街地が洪水の被害を受けたと確かに分かるもののみ抜粋したが、「幡多郡洪水」とか「幡多郡中村、町中水の高さ他より六尺」とか、中村市街地も含まれるであろう洪水の記録は夥しく見られる。
- (14) 高知県立埋蔵文化財センター HP <https://www.kochi-maibun.jp>
 - (15) 下村・他 (2012) 『高知県の歴史』 山川出版社 44 頁、123 頁
 - (16) 高知県立埋蔵文化財センター HP <https://www.kochi-maibun.jp>
 - (17) 岡本憲治 (1978) 『不破と角崎』 3 頁、6 頁
 - (18) 中村市史編纂室 (1969) 『中村市史 正編』 中村市 770 頁 - 785 頁
 - (19) 対する下田地区の人々も、やはり「ゴウ」とか「ゴウブン」とか呼んで、農業従事地域住民と自身らを区別している。
 - (20) 中村市史編纂室 (1969) 『中村市史 正編』 中村市 222 頁 - 227 頁
 - (21) 市村高男 (2010) 『中世土佐の世界と一条氏』 高志書院 9 頁 - 57 頁
 - (22) 宇賀嘉弥太 (1932) 『下田郷土史料』
 - (23) 木村剛朗 (1987) 『四万十川流域の縄文文化研究』 幡多理文研 395 頁 - 408 頁
 - (24) 明治神社誌料編纂所 (1912) 『府県郷社明治神社誌料』
なお、天元 (978-983) 頃と考えれば時代は合うが、七星剣がいつの時代から納められているのか、という問題も生まれる。要検討。
 - (25) 横井靖仁 (2004) 『鎮守神と王権』 (『中世一宮制の歴史的展開下』 収録)
 - (26) 吉井良隆 (1967) 『「一宮」の選定とその背景』 『現代神道研究集成 第 2 巻』 収録
 - (27) 例えば隣市の宿毛市では、宿毛十傑をはじめとした宿毛出身の偉人に関する副読本を作成し、市内の小学校に無料配布しているが、四万十市ではこれと言って目立った教育は行われていない。また宿毛歴史館には常駐の学芸員が 3 名いるのに対し、四万十市郷土博物館には考古学専門の学芸員が 1 名いるのみで、後の職員は市の生涯学習課の所属である。どの本であったか、「四万十市立郷土資料館

は収蔵品の管理が杜撰だ」などと指摘されているのを見かけたこともある。

・参考文献一覧

- 徳永誠太郎（2009）『四国地方の祭り・行事 1』海路書院
- 高知県教育委員会（2006）『高知県の祭り・行事』
- 中村市教育委員会（1975）『不破八幡宮神事』
- 中村商工会議所（2017）『不破八幡宮「神様の結婚式」』
- 中村市史編纂室（1969）『中村市史 正編』中村市
同上（1984）『中村市史 続編』中村市
- 岡村憲司（1987）『小京都中村』
- 金良柱（1989）『神々の結婚－四万十川流域社会における「ハチマンサン」とその変化』「民族研究 54 巻 3 号」
- 同上（1994）『儀礼の動態と現代社会：四万十川流域における「マツリ」とその変化過程からのアプローチ』東京大学大学院総合文化研究所文化人類学博士学位論文
- 柳田國男・大間知篤三（1975）『婚姻習俗語集』筑摩書房
- 田村恒夫（2013）『実録・嫁かたぎ婿かたぎ：昭和の時代まで続いた“嫁さらい”の記録』エリート情報社
- 佐々木高弘（2014）『神話の風景』古今書院 205 頁－209 頁
- 江守五夫（1986）『日本の婚姻－その歴史と民俗－』弘文堂
- 瀬川清子（1957）『婚姻覚書』大日本雄弁会講談社
- 柳田國男（1948）『婚姻の話』岩波書店
- 香川大学教育学部地理学教室・編（1999）『地理学研究 第 48 号』
- 下村公彦・市村高男・森公章・田村安興・萩慎一郎（2012）『高知県の歴史』山川出版社
- 岡本憲治（1978）『不破と角崎』不破・角崎代表
- 市村高男（2010）『中世土佐の世界と一条氏』高志書院
- 香川大学教育学部地理学研究室（1999）『地理学研究』第 48 号
- 明治神社誌料編纂所（1912）『府県郷社明治神社誌料』
- 木村剛朗（1987）『四万十川流域の縄文文化研究』
- 幡多理文研』
- 宇賀嘉弥太（1932）『下田郷土史料』
- 横井靖仁（2004）『鎮守神と王権』「中世一宮制の歴史的展開下」
- 吉井良隆（1967）『「一宮」の選定とその背景』「現代神道研究集成 第 2 巻」